

平成26年度研究成果中間報告書《平成26年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	59	都道府県・指定都市名	京都市	研究課題番号・校種名	3(4) 中学校
				領域名	E S D
研究課題	<p>新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p> <p>(4) E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p>				
ふりがな 学校名 (児童生徒数)	<small>きょうとしりつきがちゅうがっこう</small> 京都市立嵯峨中学校 (648人)				
所在地 (電話番号)	京都市右京区嵯峨新宮町 63-2 (075-871-0533)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	京都市立嵯峨中学校HP				
研究のキーワード	<p>「地域とともに学校づくり」を行う</p> <p>「活動や学習を通して、E S Dで身に付けさせたい価値観や重視する態度・能力を伸長する」</p> <p>「活動や学習を通して、自己有用感を獲得し、さらに意欲の向上を図る」</p> <p>「E S Dの必要性について (生徒が社会に向けて) アピールする」</p> <p>「E S Dと教科指導との連携を図る」(2年次)</p>				
研究成果のポイント	<p>E S Dの出発点であり、原動力である、野外におけるフィールドワークを地域とともに実施し、実際に自分の足で歩き、専門の研究者や地元の方の解説を聞き、自分の目で確かめ、考えることができたことは、これから生徒が「持続可能な社会づくり」について考えていく上で、貴重な体験＝「核」となった。</p> <p>生徒の環境学習の集大成である「嵯峨中パレード」に、E S Dの視点を盛り込んでリニューアルし、生徒自身が「持続可能な社会を作ろう」というメッセージを地域社会にアピールすることができた。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

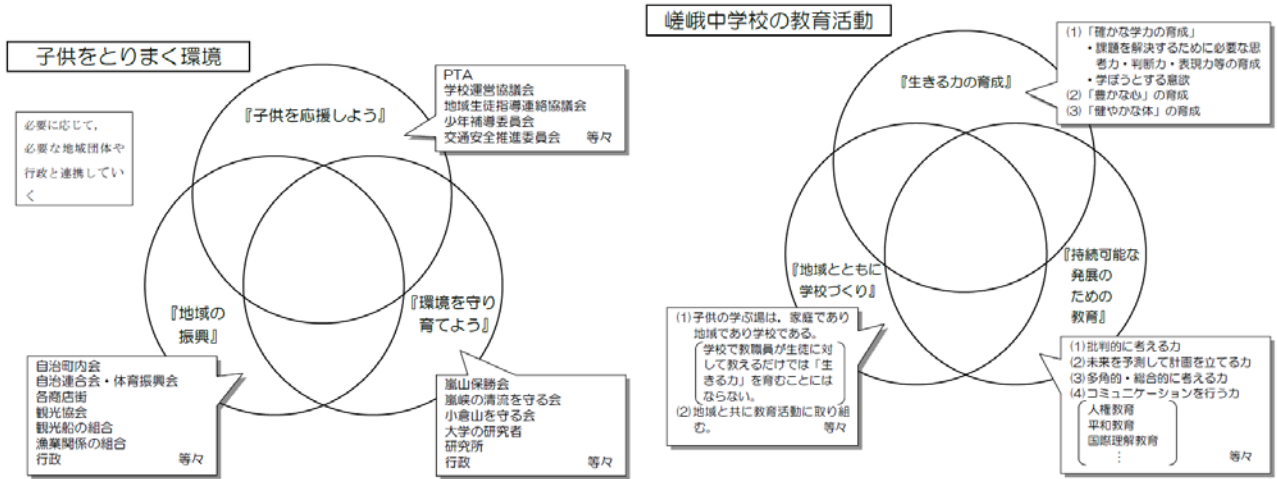
地域との連携によりE S Dを推進する教育の在り方を探究する。

(2) 研究主題設定の理由

本校校区は、日本でも有数の観光地である「嵯峨・嵐山」を含み、観光産業に関係する人も多く住む。こうした環境のもとで生活する本校生徒には、環境保全や観光振興の重要性は理解し易い事項であり、自然環境と開発の共存を探究する視点での環境教育を実践し、E S Dに根差した意識の涵養も図りやすい環境にある。

そこで、これまでに実践されてきた環境教育に、E S Dの視点を導入し、①「これまでの環境教育がともすれば自然教育となりがちで、社会的・文化的側面からの考察に欠けていたこと」、②「初めから問題ありきの環境教育であって、問題そのものについての掘り下げた考察に欠けていたこと」、③「それらの結果として、結論も『だから〇〇しないようにしましょう』といった短絡的・道徳的な結論に陥りがちであったこと」の3点を克服すべき課題とし、環境教育にE S Dの視点を導入した取組・実践を地域住民や大学や公的機関の研究者等の協力の下、推進していきたい。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組・・・各学年の生徒が取り組み、学習する順序に並べた。

平成26年度	<p>前段階：1年生の夏休みの学習で「嵯峨嵐山に関する史跡・名勝を調べよう」（2年生での学習の基礎の位置付け）</p> <p>① 2年生の夏休みの宿題で「地域の環境について調べよう」（個人研究）に取り組んだ。</p> <p>② 2年生の9、10月に、先の個人研究をグループ（4人程度）で共有して内容を深め、『環境壁新聞』の作成に取り組んだ。（文化祭で展示発表）</p> <p>③ 2年生の12月の「嵐山フィールドワーク」で、実際に山に入って現状を観察し、自然環境を持続的に守り育てるための取組を学び、自分たちが取り組むことについて考えた。（京都大学・京都府立大学の研究者、森林管理事務所や地元の人々等の協力を得た。本件に関わる生徒研究報告会は、1月28日（水）に実施し、国研担当官からも助言を得た。）</p> <p>④ 2年生の2月には、嵐山にヤマザクラの植樹（募金活動の費用を充当）を行った。（森林管理事務所や地元の人々と協力して実施した。）</p> <p>⑤ 3年生の5月から7月にかけて、「中学生による嵯峨嵐山にふさわしい土産物の新商品企画開発」の取組を行った。（収益はヤマザクラの植樹の経費に充当）</p> <p>⑥ 3年生6月に、夏になると大堰川に繁茂するオオカナダモ（外来種）を、地元の人々と協力して、除去する作業を予定した。（本年度は昨年の水害のため藻が繁殖せず中止になったが、取組の事前学習として淀川河川事務所による「外来種が環境に与える影響」についての講演会を開催した。）</p> <p>⑦ 3年生の10月に、「持続可能な社会を作しましょう」を大テーマに、「環境保全」と「観光振興」を訴える『嵯峨中パレード』を実施し、地元をはじめ国内外の観光客にアピールした。</p>
平成27年度	<p>本事業2年次の取組としては、「ESDで身に付けさせたい価値観や重視する態度・能力」を伸長させるために、教科指導の工夫・改善にも取り組む予定である。</p>

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

これまで、嵯峨嵐山地域の環境学習を積み上げてきたが、この地域を襲った今年の9月16日の台風18号の洪水による被害は、嵯峨嵐山地域の「環境保全」だけを考えていても、上流で局地的

豪雨が降れば、嵯峨嵐山地域にも大きな被害が出て、環境が壊されるということを我々に示した。つまり、学校の通学圏、すなわち生徒の生活圏を越えたより広い地域、ひいては国や地球的規模で「持続可能な社会づくり」を考える必要性について認識させられた。

そこで、今まで嵯峨中学校で取り組んできた様々な環境教育の取組を、より大きな「持続可能な社会をつくろう」という枠組みで捉え直し、「E S Dで身に付けさせたい価値観や重視する態度・能力」という観点から、活動や学習を系統的に整理し、それぞれの取組を改善していくことに取り組んだ。

その際、「子どもを応援しよう」という人たち、「環境を守り育てよう」という人たち、「地域の振興」をしようとする人たちと共に取り組み、彼らの評価を直接生徒自身に受け止めさせたことは、生徒の達成感や充実感の高まりを実現し、学びの深まりにもつながった。

## (2) 具体的な研究活動

### [2年生について]

- 上掲の個人研究として実施した「地球の環境について調べよう」の取組を、グループ学習で「環境壁新聞」にする過程で、「多面的、総合的に考える力」や「コミュニケーションを行う力」や「他者と協力する態度」等の伸長をねらった。
- 「嵐山フィールドワーク」では、200名余りがクラスごとに班編成を行い、大学の研究者2名（及び協力の学生）、森林管理事務所員6名、さらに（天龍寺総長をはじめとする）地域に住む環境を守ろうという人々約20名の指導の下、景観、植生、獣害、山の再生と保全等について、実際にフィールドワークを行った。生徒への説明内容は、大学の研究者に原稿を書いてもらい、各班の説明担当者が丁寧に行った。生徒が実際に地域の環境に触れることで、自然の「多様性」「相互性」「有限性」等について学ぶことができた。大学の研究者からも、生徒に対して「自然を持続的に守り育てる必要性（責任性）」や「いろんな人が協力して取り組んでいること（連携性）」を訴えてもらった。

この学習報告会は1月28日（水）に行い、その中で、持続可能な社会づくりという課題に関しては、「正解」と言えるものはなかなか示せないものの、現時点での「最適」な「解」について考えることに取り組ませ、発表させて、全体で共有した。

- 2月のヤマザクラの植樹については、森林管理事務所や地元の人々の協力を得て、周囲の高木を伐採して日当たりのよい場所を作り、周囲に獣害回避のための柵を設置した上で、6本のヤマザクラを植樹した。その際に、嵐山の荒れている状況と改善の方向性についても森林管理事務所職員から説明をしてもらい学習を深めた。植栽したヤマザクラの成長や柵内の下草の繁茂について経年の観察を行う予定である。

### [3年生について]

- 6月実施予定だったオオカナダモの除去作業については、今年度は昨年の水害のため藻が土砂とともに流されたため繁殖せず中止になったが、河川事務所研究員の方の講演等を通じて、「外来種はすべて悪い」というようなステレオタイプの理解に陥らぬよう、「外来種が従来の生態系を壊してしまう」ところに課題があることを押さえて指導した。
- 3年生を中心に10月3日に行った『嵯峨中パレード』（渡月橋から嵯峨中学校まで）は、「御輿担ぎ手」「ダンス隊」「和太鼓」「組み手」「応援団」「配布隊」「鉦」等々の役割に分かれ、地域の方々約250名の協力を得て実施した。「持続可能な社会を作しましょう」のメッセージを掲げた横断幕やのぼりと共に、沿道の観光客に配るお土産（ティッシュケース）にも『持続可能な発展を目指す社会を作しましょう』というシールを張って、広報に努めた。呼びかけは、英語・中国語でも行い、また、ヤマザクラの植樹のための募金活動では、英語・韓国語でパネルを作成したことから、日本円のほかに6か国の通貨での募金があった。生徒も達成感・充実感を得ており、

「進んで参加する態度」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「コミュニケーションを行う力」等の伸長を生徒の姿から確認できた。

「持続可能な社会づくり」という文言は、一般社会人からするとまだなじみが薄い状況ではあるが、中学生が社会に対してアピールしていることの意義を実感できた。

- 沖縄への修学旅行で、戦争や平和について見て考えたことを、文化祭において学年劇「ヌチドゥタカラ～命こそ宝」として演じたことは、「生きることの大切さ」「命の大切さ」を訴えた平和学習として「持続可能な社会づくり」の一環に位置付けることができた。

### 3 研究の成果と課題

#### (1) 成果

- 「嵐山フィールドワーク」に関わり、生徒にすればいつも目にしている風景ではあるが、実際に「山が荒れている」という現状は、まったくと言っていいほど知らなかった。「百聞は一見に如かず」の言葉どおり、フィールドワークという形で、実際に自分の足で歩き、専門の研究者や地元の方の解説を聞き、自分の目で確かめ、考えることができたことは、これから生徒が「持続可能な社会づくり」について考え、深めていく上で、貴重な体験＝「核」となった。  
山の再生と保全等については、さまざまな要素が複雑に絡みあっているため、簡単に「正解」（ベストな方法）は出せないが、現状での「最適」な「解」（ベターな方法）を考え、取り組むことの端緒とできたことは大きな成果であった。
- 環境学習の集大成である「嵯峨中パレード」に、E S Dの視点を盛り込み、リニューアルすることができた。生徒が学校で学ぶだけでなく、生徒自身が「持続可能な社会を作ろう」という認識を（まだまだ広がり少ない）地域社会や観光客（外国人観光客も含む）にもアピールし、広める取組をしたことは、生徒によるパレードの意義の再認識という点で効果があった。
- 本校の特色ある学校行事に対する取組で、生徒が達成感・充実感を感じていることは、生徒の日々の様子からも感じているところではあるが、平成26年4月の全国学力学習状況調査においても、「物事を最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」という質問に、「あてはまる」と答えた生徒が、全国平均(71.1%)を上回る74.6%であったことなどにも裏付けられた。

#### (2) 課題

- 本年は、本校の総合的な学習の時間の取組や学校行事を、E S Dの視点から捉えなおし、「持続可能な社会づくりの構成概念」や「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の伸長を盛り込み、改善したが、今後各教科を結び付けた教育課程全体の取組として充実させるという点において課題を残している。本事業2年次の課題としたい。
- 本校の様々な取組は、学校外部との連携を前提にしており、教職員だけでは企画・運営はできないものとなっている。地域との連携と協力があって、初めて生徒に学びのインパクトと深さが生まれると考えているが、引き続き、学校と外部諸機関、地元住民とのより良い連携の在り方について検討を重ねる必要がある。

#### (3) 研究2年目へ向けての取組

平成27年度は、教科学習の中で「持続可能な社会づくり」に関わる課題を取り上げ、上記の能力や態度を身に付けることができるように、授業の改善・工夫に取り組んでいくことで、汎用性のある力としていきたい。加えて、本年の取組から派生して、除去した「オオカナダモ」を肥料にすることができないかを実験する（循環型社会について考える）取組や、（学校の取組を聞きつけた地域の方から提案された、）学校の中を流れる有栖川において、ホタルを孵化させる取組などについて、その実施の可能性を検討したい。